平成15年度吾峰会研究奨励金受賞者論文紹介

生きる力を育む学習活動の創造
～ひびき合い学び続ける子どもの姿を求めて～

藤　田　克　孝（郡山市立橘小学校）

本校では，平成10年度より「生きる力を育む学習活動の創造」を大主題として研究実践に取り組んでいる。平成13年度からは本副主題を掲げ，対象とする教科・領域を広げ，人や事物・対象とのかかわりを大切にした授業づくりに努めている。

【キーワード】 まなび合い（課題追究力）　つたえ合い（表現力）　みとめ合い（理解・尊重の態度）

Ⅰ　研究主題

1　研究主題

生きる力を育む学習活動の創造
～ひびき合い学び続ける子どもの姿を求めて～

2　主題設定の理由

(1)　今日的課題から

変化の激しい社会に柔軟に対応し，主体的，創造的に生きていくために「生きる力」を育成していくことが大切である。今，学校教育には，豊かな心と自ら学ぶ意欲を育てながら，基礎・基本や自己実現の力を育み，生涯にわたって学んでいく基礎を培っていくことが求められている。

また，本県では基礎学力向上の取り組みの一つとして「分かる授業」の実践を掲げている。具体的には次の点を大切にした授業の実現であり，これは，本市で掲げている「自ら学びとる授業」と軌を一にする。

①　学習目標や学習内容が分かる授業
②　学習方法や追究する方法が分かる授業
③　共に学習するよさが分かる授業
④　学習したことが役に立つ事が分かる授業

このような課題を踏まえ，学習指導では，知識の量ばかりでなく自ら学ぶ意欲や思考力，判断力，表現力などの資質や能力を総合的に育てていく取り組みが一層大切である。

(2)　本校の教育目標から

本校教育目標の「進んで学ぶ子ども」では基礎・基本の定着や自己解決力の育成などを実践事項として掲げ，意欲的に学んでいく子どもを，また，「思いやりのある子ども」では，自他のよさを認め合う心の育成や共に生きる心の育成などを実践事項として上げ，かかわりながら学んだり理解し合ったりすることのできる子どもを育てていきたいと考えている。

(3)　子どもの実態から

市街地中心部を学区にもつ本校の子どもたちは，明るく素直な子どもたちが多いが，生活空間の制約などから自然とのふれあいなどの体験が不足しがちであり，体験を通して学んだり実感を伴って考えたりする経験が少ない。一方，様々な友だちとふれあい思いやりの心を持ってかかわりながら成長していく姿は，本校の子どものよさの一つである。このよさをさらに広げ，様々な人々と積極的にかかわり，自他を認め合ってよりよく生きていこうとする姿勢を育てていきたい。

このような実態を踏まえ，本校では，上記主題を掲げ，様々なかかわりを通して考えたり問題を解決したりする力を育てていく教育実践に取り組みたいと考えている。主題に掲げたひびき合う授業を実現することが，子ども一人一人の自己存在感を高め，充実した学校生活を送りながら，生涯にわたって楽しく学び続けていく基盤を育むと考える。

3　研究主題の解釈

(1)　めざす子ども像と育てたい資質・能力

今日的学力観や本校の子どもの実態から，本研究を通して育てたい「生きる力」につながる資質や能力を次のように３点掲げる。（本校で育てたい生きる力）

○進んで問題を解決する子ども

対象や事象に興味・関心を持ち，かかわったり協力し合ったりしながら課題を追究する能力や態度

（課題追究力）

○よく考え，豊かに表現する子ども

自分の考えをしっかり持って，豊かに表現したり，しっかりと受け止めたりしながら互いに交流できる能力や態度　**（表現力）**

○よさを大切にする子ども

異なる考えや生き方を認めるとともに，自他のよさや不十分さ，様々な価値観に気づき，学んだことを生かしよりよく生きていこうとする心情や態度

（理解・尊重の態度）

全体を通してかかわりながら問題を解決する力を育成し，めざす「ひびき合い学び続ける子ども」に迫っ

ていきたい。

(2)　主題に示した「ひびき合い」と「学び続ける」について

上に示した資質や能力は，課題の発見，見通しの獲得，課題の追究，高め深める表現活動，などの過程を経ながら身についていくものである。また，これらの学習から得た成就感や反省などから新たな課題や意欲が生まれて学びは連続していく（「学び続ける」）。

「ひびき合う」姿とは，この学習の過程において「まなび合ったり」「つたえ合ったり」「みとめ合ったり」する姿ととらえる。これらの姿は，素材や学習内容（事象・対象）との出会いにより興味や関心，意欲が喚起され，さらには，友だちや教師，あるいは専門家や地域の方々など様々な人とのかかわりによって成り立ち，充実してくる。主題に掲げる「ひびき合い」は，このように人や事象・対象とのかかわりから生まれる（「ひびき合い」）。

学びには，前者のような連続性と後者のような広がり・深まりの２つの側面がある。一人一人の子どもの学びは，子どもの身体が充実期と成長期の２つの面を経ながら育っていくように，様々なかかわりの中で生まれた広がりや深まりが個々に返っていくことでさらに連続していく（ひびき合いと学び続けることの関連）。

このような学びの姿が，生涯学び続ける姿に結びついていくと考える。

Ⅱ　研究内容

1　授業改善の視点とポイント

ひびき合う授業

> かかわりながら，まなび合ったり，つたえ合ったり，みとめ合ったりする学習活動
>
> **視点１　まなび合う（課題追究力）**
> **視点２　つたえ合う（表現力）**
> **視点３　みとめ合う（理解・尊重の態度）**

育てたい資質・能力と関連付けて，実践の視点を上記の３つに整理した。各教科・領域等のねらいを効果的に達成するための工夫点として位置づけ取り組んだ。

2　ひびき合う授業づくりのベースとしての取り組み

(1)　交流活動の推進・学習環境づくり

(2)　基礎学力向上プランによる補充

Ⅲ　研究の経過

1　全体構想をもとに，低・中・高・養護のブロックごとに３つの視点を大切にしたブロック構想をたて実践に励んだ。平成15年度は，健康教育ブロックを新設し，養護教諭や栄養士による実践も研究の一環として取り上げた。

2　授業実践の中心となる教科・領域等は学年・学級ごとに決めて実践にあたった。研究授業では，指導助言者を招聘し，授業参観カードを活用した話し合いによって指導法の改善に努め，深めてきた。

3　研究の成果として，単元前後の実態調査を教科や領域に応じて行い，子どもの変容の把握に努めた。

また，具体的な手立ての有効性を確かめたり増やしたりして，本校の財産とした（視点研究の手立ての累積）。

4　全学級公開による自主研究発表会を，ふくしま教育週間にあわせて実施し，県内外の各種学校の先生方，地域や保護者に成果を公開した。

～新設した健康教育ブロックの授業から～

Ⅳ　研究の実際

1　低学年ブロック道徳の実践から（第２学年）

主題名　「どうしたらいいのかな」

生活経験が次第に豊かになり行動範囲が広がってくると，周囲とのかかわりがぐんと増え，家庭や学校で様々な問題場面に直面する機会が増え，自己決定や判断に迫られることが少なくない。個々の価値観を育てるとともに，子どもが持っている価値観に気づかせながら道徳的判断力を育んでいく取り組みが必要であると考えた。

〈まなび合うために〉

○複数の価値を含んだ自作資料を活用する。

○選んだ行為を吟味するために役割演技を行う。

〈つたえ合うために〉

○考えの明示や話し合いの充実のためにネームプレートを準備する。

〈みとめ合うために〉

○役割演技のあとに自分を見つめる再吟味の場を設ける。

授業では，森のパン屋さんの開店祝のシール配りに

並んでいたところ，風で飛ばされた帽子を追って列を離れてしまったりすが列に戻ってよいかどうかという状況を役割演技を通しながら考えていった。

「シールは，ぜったいぼくのものだぞ。わたさないよ。」と限られた枚数しかないシールを自分のものだと主張するキツネの演技に対して，「それじゃあ，りすさんがかわいそうだよ。」「ぼうしはかってにとんでしまったんだから，りすさんはわるくない。」とりすの立場を思いやり弁護する考えや，「りすさんは，れつをはなれたんだから一番後ろにならぶべきだよ。」といった規則を大切にする考えなどが出され，話し合いを通して判断の基になる考えを深めることができた。

～役割演技を通してまなび合う～

終末の段階では，話し合いを踏まえて再吟味したり，教師の説話を聞いたりすることで一層考えを深める姿が認められた。

2　中学年ブロック算数の実践から（第4学年）

単元名　「わり算のしかたを考えよう(2)」

数と計算領域の個人差が大きいことから，第3学年時からTT加配教員との習熟度別コース学習を行ってきた。本単元では，アルゴリズムの理解が中心となっていた1学期のわり算の筆算の学習を受け，筆算をつくり上げる学習を通して筆算に含まれる数理的な処理のよさに気づくことができるような取り組みを試みた。

〈まなび合うために〉

○筆算を作り出す算数的活動を取り入れる。

〈つたえ合うために〉

○既習の筆算を根拠とする表現活動を取り入れる。

〈みとめ合うために〉

○お互いの考えの良さに気づくことができるように，観点を明らかにした話し合い活動を展開する。

じっくりコースでは，具体物を使った操作活動を大切にし，操作活動を通して気づいたことを交流することで，わり算の方法や意味の理解を深めることができた。また，少人数で一人一人を確実に支援することで，筆算の定着をはかることができた。

しっかりコースでは，一人一人がしっかりと考えを持った上で表現活動ができるように，ノートづくりに力を入れた。話し合いの場のコーディネーターとして教師が一人一人の考えを把握しながら話し合うことで，数理の良さに気づく発言を引き出しながらわり算の仕方の確実な理解と定着に結びつけることができた。

～解決方法をつたえ合う～

ぐんぐんコースでは，虫食い算，外国のわり算など素材を工夫することで子どもの追究意欲や思考活動を高めながら筆算が成り立っている意味を考えた。虫食い算の素材は，計算順序を逆からたどることで商の立て方を確実にし，いろいろな国の割り算を比較検討することは筆算方法のもつよさを確かめ，みとめ合うことにつながった。

これらのコース別学習の取り組みの評価に学力テストで変容を調査したところ，大きな伸びを認めることができた。また，子どもたちからは習熟度別学習について「学習がとてもわかりやすい。」「自分にあったやり方で学習できる。」などの声が多く出されている。

3　高学年ブロック国語科の実践から（第6学年）

単元名　「作家と作品に出会おう『きつねの窓』」

子どもたちは，1学期に宮沢賢治の「やまなし」を学習し，これまでに味わったことのない文学作品の面白さにふれてきた。この発展として，自分の読みのこだわりや問いに沿って文学作品を読み深め，その思いや考えに対して互いに友だちと意見交流し合い，新たに作品の面白さや魅力を発見できる授業を目指して，安房直子作『きつねの窓』を教材にして取り組んだ。

〈まなび合うために〉

○問いの一覧表を活用し，一人一人が自分の考えをもてる読み取り（個人読み・グループ読み）の時間を工夫する。

〈つたえ合うために〉

○パネルディスカッションの手法を応用し，話題提供をもとに話し合いを展開していく。

〈みとめ合うために〉

○共通点や相違点を踏まえ，多様な読みを認め合え

るように支援する。また，話し合いを受けて自分の考えをまとめる時間を大切にする。

個人読みやグループ読みを受け，話し合いでは，次の3つが話題の中心となった。

・きつねはなぜ鉄砲をもらったのか。
・正体がばれてもなぜきつねはにげなかったのか。
・「指の窓」とはなにか。

話し合いでは，「きつねは最初から正体がばれることを覚悟で鉄砲をもらおうとしていたのか」という疑問から様々な意見が出され，話し合いが続いた。想像による話し合いが続く中，「これ，ぼくのお母さんです。」という文を見つけることで「この文からきつねは正体がばれてもいいと思って最初から『ぼく』をさそったのではないか」という発言を引き出すことができ，叙述に基づいたまとめができた。

このように叙述に基づいて話し合いを進めるための教師の積極的な働きかけを大切にしながら，他の2点についても話し合いを進めることができた。

話し合い後のノートには，「三回話し合って三つの話題がつながり，『きつねの窓』の話がよく分かりました。2番目の話題については考えはいっしょなんですが，子ぎつねが主人公のことをなぐさめていると思いました。」など，自分の読みと多様な読みを大切にする感想が記されていた。

～様々な読みをみとめ合う～

4　養護ブロック生活単元・総合的な学習の時間の実践から（たんぽぽ学級・ひまわり学級合同）

活動名

「手作りパン＆クッキー工房たんぽぽ・ひまわり」

本校の養護学級には，情緒障害児5名と病弱・身体虚弱児2名が在籍している。個々の実態に違いはあるものの，生活経験やコミュニケーションの力が不足している点が共通している。

そこで，児童の興味・関心の高い食に関する素材を取り入れながら人や物にかかわっていく意欲や力を育てる取り組みを2学級合同で行っている。

〈まなび合うために〉

○子どもの興味・関心のある食に関する素材を活用する。

〈つたえ合うために〉

○自己決定を思いや願いの表現の場ととらえ，選択の場を充実する。

〈みとめ合うために〉

○互いの思いを確かめるふれ合い，かかわり合いの場を充実する。

実践では，パンケーキ作り，パン屋での買い物，店の開店など多様な活動を通して，子どもの活動体験を増やすように努めながら学習を進めた。

重点的に取り組んだパンとクッキーのお店を開く学習では，パンケーキ作りや買い物などの学習を生かしながら，お店を開いたり買い物をしたりする活動を工夫した。子供同士のコミュニケーション活動を充実させる必要があるという反省を踏まえて，実際に売る，買うといった行動を，言葉を通しながら体験させるように努めた。

お店を開く子どもからは，「いらっしゃいませ～」「ありがとうございました～。また，どうぞ」などの声が，また，買い物をする子どもたちからは「こんにちは。○○ください。」などの声が自然に出てくるようになってきた。

研究公開では，これらの学習の成果を生かして参観下さった方々にご協力いただき，より広いかかわりの中で学んだことを体験できるようにした。初めて接する方々にも笑顔と大きな声で応対する姿に，取り組みの成果をみることができた。これらの成果は，日常生活でも見られ，発語が増え，表情も豊かになってきている。

～初めての人にもにこやかにかかわる～

V　実践をふりかえって

平成15年度は，健康教育ブロックを新設し，養護教諭や栄養士による実践を研究として行うなど，全職員が一丸となって授業づくりに取り組むことができた。

まなび合い（課題追究力），つたえ合い（表現力），みとめ合い（理解・尊重の態度）の3つの視点を取り入れて授業作りをすることで，学ぶ意欲や思考，判断，表現などの生きる力に結びつく力を育む学習指導ができてきた。また，ひびき合う授業は，子どもが自己存在感を感得できることにつながり，よりよい人間関係の醸成や明るい学校づくりに結びついている。

本研究は，研究仮説を立てずに視点を設定して行う「視点研究」の手法により実践研究を進めてきた。各視点に関わる手だての累積と整理を進めることができた。今後も視点研究のスタイルのよさと留意点を自覚し，継続していきたい。

3つの視点を大切にして指導していくには，ゆとりある単元構成が不可欠である。指導時数に限りのある今日，年間の教材全体をしっかりとつかみ，重点化を図る単元や育てた力で応用していく単元など，教育課程全体を見極めながら研究を進めていきたい。また，表現活動をゆとりあるものにするために，授業時間の弾力的な運用も心がけていきたい。

今後も，今日の学力観を大切にしながら研究実践を一層推進し，生きる力を身につけた子どもを育てていきたい。